

## 研究論文

# (公財) 輔仁会・明倫学舎の存在意義

## —地方創生への示唆—

Meaning of Hojinnkai・Meirinngakusha's Existence

神崎 洋治\*

はじめに

- I. (公財) 輔仁会・明倫学舎の歩み
- II. 時代と共に変革した学生気質
- III. 明倫学舎生の証言
- IV. (公財) 輔仁会・明倫学舎の存在価値 (1)
- V. (公財) 輔仁会・明倫学舎の存在価値 (2)
- VI. 福井県の地方創生への示唆
- VII. まとめ

戦前、日本の旧制中学校への進学率は現在の大学進学率よりはるかに低く、その中で旧制大学に進学する人は、ほんの数パーセントに過ぎなかった。戦後の福井県高校卒業者の大学進学者数と進学率をみると、1950（昭和25）年は629人で卒業生の16.8%であったが、1967（昭和42）年は2,461人で18.7%、1975（昭和50）年は3,689人で37.1%に上昇し大学進学者数、及び進学率が急激に増加して大学への進学が大衆化された。近年では2005（平成17）年は4,525人で52.3%にまで上昇している<sup>1</sup>。

かつて大学教育は特別選抜された人々のみの時代があったが、近年の進学希望者は、多様な層に広がるとともに、数の上ではほぼ大学へ進学可能であり、大衆化された事象がある。これは戦後の人口増加と密接に関係し、1965（昭和42）年からの団塊世代の18歳人口と1990年前半の第2次団塊世代が影響しているが、社会全体がグローバル化してきた現代に、大学卒業レベルの人材を要求しているからでもある。

この間、大学の設立も増大し、全国で1940（昭和15）年には45校であったが現在は500校を超えている。私学の急速な台頭や、地方自治体による大学の設立などが影響している。

こうした中で、近年の大衆化された現状に「真の大学生教育とは何か」と大学生教育に内在された問題が問われはじめている。また、「地方創生」の機運が高まる中で、県外に進学した大学生の卒業後の動向にも注目が集まっている。本稿では、それらの問題解決の一助として、(公財) 輔仁会・明倫学舎の存在意義を考える。

**キーワード：**地方創生、人間形成、団体生活、切磋琢磨、人間関係調整力、先人達の薫陶

\* 福井県立大学地域経済研究所 客員研究員

## はじめに

地方から東京の大学に進む青年の胸中には「青雲の志」と言う言葉がある。その高い志を抱いた福井県出身の学生を受け容れる学舎は東京都内に三学舎ある。

そのひとつに、東京都武蔵野市吉祥寺東町に（公財）輔仁会・明倫学舎（以下、明倫学舎と省略す）がある。

人生の青年期後半から成人期前半の多感な時代に、進取の気性に燃え、同郷から上京して異なる大学、異なる学部学ぶ大学生達が団体生活を過ごす学舎である。団体生活を通して、社会性を身に付け、学業と自己研鑽で自らの成長を促す事を目的としている。

本稿では明倫学舎の卒業生や在舎生からの聞き取り調査などを基に、大学生教育におけるその存在意義に接近してみる事にした。このような学舎は大学生教育の在り方を巡って取り上げられることは極めて少ないが、聞き取り調査の結果、学生時代や、その後の進路、社会人としての活動にも学舎の存在が重要な影響を与えていることが明らかになった。したがって本稿の考察にも一定の意義があると考えられる。

岡部光明<sup>2</sup>は大学生にとって在学4年間は人生において二度とない貴重な時間であり、大学で学ぶべきことは以下の三つであると述べている。

第一は理解力である。論理的な思考力による理解力である。

第二は伝達力である。第三者に対して、自分の主張、理解、あるいは感情をいろいろな手段によつて的確に伝える力量のことである。コミュニケーション能力、或いは説得力と言

っても良い。

第三は社会力である。平たく言えば、社会の基本ルールをよく理解しており、また相手を思いやる心を持っていることである。すなわち人間として相応しい対応のできる姿勢（論理的な座標軸）を常時保持しており、それによって品位が感じられるような力量と言っても良い。

以上の全てを個々の大学で行われる大学生教育で行うのは限界があるだろう。とりわけ伝達力や社会力は多様な機会が開かれている方が高い効果を発揮すると考えられる。明倫学舎は、まさにその重要かつ稀有な機会となるものである。

明倫学舎に入舎した学舎生は4年間で、上記三つの力の中の、特に伝達力と社会力を団体生活の中で、お互いが協調しながら実践で学び磨くのである。

明倫学舎に掲げられている学生育英事業の理念は次の通りである。

1. 学業以外に豊かな心の育成をうながすこと。
2. 正義感、公平、人権、生命を尊重すること。
3. 他人を思いやり、他者との共生力を養うこと。
4. 責任感を醸成し社会貢献を促すこと。

昨年（2015年）で輔仁会・明倫学舎となり70周年になったのを記念し、多くの学生がどの様に学舎で団体生活を送り、その経験が卒業後に、それぞれの人生と社会貢献にどのような価値があったのか調査を行った。残念ながら戦前の様子は僅かに残された資料を基に記載するしかないが、可能な限り寄稿文を募集し、OB舎友へのヒヤリングや現役学生に対してのアンケートを実施した。

その結果、直接多くのOB舎友、現役学生舎友の協力を得て、その胸中にあった実体験

を浮かびあがらせて整理して書き、語っていただいた。その内容は「輔仁会明倫学舎の歴史と意義」と題してまとめられた。本稿では、その様々な資料を整理・抽出して大学生教育における明倫学舎の存在意義がどこにあるのかを研究する。

すなわち明治以来、先人たちが取り組んだ輔仁会・明倫学舎の育英事業が、福井県から東京に出た学舎生にどのように刺激を与え、どのように成長していったか。団体生活で育まれる自主性、自律性、人間関係調整力、先輩、同輩、後輩の人脈の結び付など、学舎生活の中で育んだ豊かな心の醸成が、社会人として踏み出した時に、どの様に道標としての役立ちをしたのか等を明らかにする。この事で、近年の社会において、ともすれば疎外、軽視されつつある貴重な人間関係形成の一過程も明らかになる。

注) なお最近、福井県内での明倫学舎の理解度が低く、近年入舎希望者が減ってきている。この現実を広くアピールできていないことは筆者を含むOB舎友と、輔仁会の努力不足であると同時に、この状況は人間関係醸成が失われつつある現実を物語っている。何か活動を興し、明倫学舎でぜひ学生生活を過ごしたいと思う学生確保をしようという思いと、伝達力と社会力を含む真の大学生教育を推進しなければという思いが、近年OB舎友の中に生まれてきた。明倫学舎で4年間過ごす事が、後の人生に計り知れない貴重な財産的価値が得られるとの声を世間に届ける必要がある。

そのような思いから2015年8月29日に福井商工会議所にOB舎友130人ほどが参集し

て、(公財) 輔仁会・明倫学舎発足70周年記念舎友総会が開催された。古くは1953(昭和28)年から直近では2014(平成26)年までの明倫学舎生活を経験したOB舎友の集いであった。

さらに、明倫学舎の存在は福井県の発展にも深く寄与してきている。過去のOB舎友の活躍はもとより、近年、福井県から高校を出て県外に進学する約3,000人のうち約300名が関東方面である。その中に毎年15~20名程が東京で明倫学舎の貴重な団体生活を送る。そして4年後、約3割程度の卒業生が福井県に戻る。現在、様々な地域、分野で活躍するOB舎友と同様、若手の舎友達もこれからの福井県の発展に寄与する人材になる可能性がある。昨今注目されている地方創生の在り方を論ずる上でも貴重な示唆を与えるであろう。

## I. (公財) 輔仁会・明倫学舎の歩み

明治維新後、日本の学生寮は、新政府の富国強兵策で西欧列国に追いつくために、高等教育の場として、新都東京に旧各藩の優秀な人材を集めたことに始まる。

全国各県の東京学生寮人数は、現在約40寮程である。自治体や育英会などの関連団体が運営する寮や個人が出資した学生寮などがあり、戦前に設立されて旧藩校に由来する寮も多い。明治維新後、旧藩敷地内で始まったところも13寮を数えている<sup>3</sup>。

その40寮程のなかで現在、東京都内にある福井県関係だけで3寮ある。全て旧藩主が、育英事業を重んじて自らが主体となり設立した学生寮である。

- ・ 輔仁会は1883（明治15）年に旧福井藩が中心となり設立した。
- ・ 明倫学舎は1928（昭和3）年に旧大野藩が中心となり設立した。
- ・ 上記二つの学生寮の「輔仁会」と「明倫学舎」が1945（昭和20）年に併合し現在の（公財）輔仁会・明倫学舎となる。
- ・ （公財）雲浜奨学会講正学舎は1901（明治33）年に旧小浜藩が中心となり設立した。
- ・ （公財）武生郷友会学舎は1888（明治20）年に旧府中藩が中心となり設立した。

これらの学生寮は、福井県から高い志を以て上京した若者達に、学業専念と生活安定の支援と、人間性を磨く「豊かな心創り」を支援し、永い歴史の中で育英事業として重要な役割を担ってきている。現在この3学舎に約150名の福井県出身の学生がいる。

育英団体輔仁会は『福井県教育百年史』<sup>4</sup>によると、1882（明治15）年3月に村田氏寿、橋本綱常、瓜生寅、関義臣ら旧藩士17名が発起人となって設立した。発足については第17代福井藩主松平茂昭と松平慶永（春嶽）が多額の寄付を行っている<sup>5</sup>。輔仁会の運営については、前藩主をトップに据え福井藩家臣団<sup>6</sup>という強固な同族集団で組織されていたことが確認できる。

その年、神田三崎町の学舎の第1期生は永井環<sup>7</sup>、竹内外雄の二人であった。1892年（明治25年）小石川金富町20番地に移転、1945年（昭和20年）の空襲で焼失するまで存続した。

一方、明倫学舎は1928（昭和3）年に旧大野藩の土井家が主体となり東京府下吉祥寺町の大野藩所有の畑に育英事業として学生寮を建て、大野藩の藩校に由来する名称「明倫

学舎」と名付けて運営した。しかし1944（昭和19）年に経済的理由で運営を断念し、育英事業の継続と明倫学舎の名称を残すことを条件に福井県に無償譲渡した。

福井県は1945（昭和20）年1月、明倫学舎の運営を輔仁会に委託した。輔仁会は小石川の学舎が同年5月空襲で焼失したため、吉祥寺の明倫学舎に移転し、現在の輔仁会・明倫学舎が始まり今日に至っている。

## Ⅱ. 時代と共に変革した学生気質

前章では、明倫学舎の歩みについて概観したが、学舎生達の明倫学舎で生活を送る学生気質も時代と共に変化しつつある。ここでは、明倫学舎の施設構成や学生生活の変遷と共に学生気質がどのように変化したのかを整理しておきたい。

### 1. 戦前の学舎生活と学生気質

戦前の学舎生活が記載されたものが少なく、存命の方々もほとんどいなく、気質を語るには資料不足であるが、1924（大正13）年入舎の吉田玄七氏の手記「輔仁会の思い出」<sup>8</sup>を引用する（原文のまま）と、当時の小石川町の輔仁会学舎の様子や学生生活の一部が解る。

「前年の大震災<sup>9</sup>の被害も見当たらず、昔ながらの佇まいの町並に輔仁会はあった。左隣は二、三軒隔てて金富小学校、右は急な坂道を上って伝通院に通じる。敷地は約300坪で、堂々たる石柱を建てた門は厳めしいが、建物はボロボロであった。門を入ると舎監先生<sup>10</sup>宅の後宅、七、八間奥の正面に二階建て本館、左手に寄宿棟が二棟立ち並び、その中

間が広場になっていた。敷地の背後には二間高程の石垣で、寺の境内であって、大きな桜の木がこちらまで伸びていた。これが門限外の夜遊び組の御帰還を助けてくれたのである。

玄関はむくり破風、入ると左右に下足棚、上がって廊下を右すれば舎監棟に通じ、左すれば寄宿棟に通じる。廊下の南側は新聞閲覧室を左とし、賄人室を右とする。北側は食堂に続く厨房であった。階上は三十畳ほどと十畳ほどの座敷となっていて、ここが毎月一度のコンパや先生の講話、あるいはピンポン室に当てられた。

寄宿棟は南北に並立し、各々六畳、三畳と八畳一部屋上下に配置されて、都合十六室で三十二人が起居するのである。寄宿棟の廊下は中間の広場に向けて吹きさらし、雨戸の仕掛けはあったが雨戸がないので冬の寒空でも明障子だけが風をさえぎる有様であった。」

この手記から、大正後期の輔仁会の学生は、築後30年程の古びた木造学舎で一部屋二人以上の共同生活をしていた。また夜遊びの学生もいたり、学舎内で舎監や先生方の講義もあったようで真面目な生活ぶりも窺えたり、大正、昭和初期の苦学生が想像できる。

一方、旧大野藩の流れを汲む吉祥寺町の明倫学舎に昭和初期に在舎した68名の名簿を大野市在住の人達に見てもらった感想は、「名簿は当時の大野町でも富裕層の商家や医者や教育者の子弟が多く、輔仁会の学生達程も苦学生が少なかったようである。また学舎も新築で当時としては快適であったと想像できる。後に地元に戻り医者や教育者になった人たちが多く見られる」と語っている<sup>11</sup>。

## 2. 1946(昭和21)年から1964(昭和39)年までの学舎生活と学生気質

戦後は小石川の輔仁会が戦災に焼かれたために、吉祥寺の明倫学舎に統合した。1946(昭和21)年に29名が寄宿していた。八畳間5室、四畳半4室であり澤田儀兵衛主事が常駐していた。三人部屋と二人部屋であった。1956(昭和31)年当時は既に学舎の老朽化が激しくなり雨漏りもひどかったと当時を語るOB舎生がいる<sup>12</sup>。

また1953(昭和28)年頃の食事について、戦後すぐには日本全国どこでも衣食住すべての事情が悪く、食糧事情は明倫学舎も悪かった。米は外米(台湾米)であり、福井の自宅とは違い個人の気ままだが通用しない学舎で、食事でおかずの好き嫌いを言う者がいなかった。納豆とおかずの関東風味付けで最初は皆が苦労した<sup>13</sup>。

しかしその後の神武景気、岩戸景気、所得倍増計画、などで学舎生の生活が急速に改善され変化した時代である。1955(昭和30)年頃からの学生は大学に行くことと警察予備隊法案、日米安保法案などの政治的活動に積極的であったが、その後の70年大学紛争時と同様に学舎内は穏やかで家族的な安住の地であった<sup>14</sup>。

学舎生活は少人数で大家族的な大らかさがあった。後述のヒヤリングの概要からでも分かるように明倫学舎が自宅のようで一年生が入舎してきても寂しさを覚えないのは、福井弁で喋ることができる安息の場所があったからである。学舎の規律は基本的に学生の自治で行われていたが、先輩、後輩各々立場を尊重して限度内の規律を遵守していた。そんな中で自分の志を切磋琢磨し磨いていた。また、

この当時には、舎監の東大教授や政財界の福井県の実業家、学舎の理事の方が頻りに立ち寄り、学生の進路指導や、人生の生き方まで支援していた。この時の薫陶を未だに忘れずに感謝しているOB舎生は多くいる。

以上のように、この時期の学生は大学や社会を取り巻く激動の時代にありながら、明倫学舎を安息の場所として確保すると同時に福井県の諸先輩との結びつきを強める場所となった。現在の明倫学舎の存在意義の基盤がこの時期に形成されたものと考えられる。

### 3. 1965(昭和40)年から1979(昭和54)年の新学舎建設大部屋時代

1964(昭和39)年の東京オリンピックを境に、東京の街並が激変した時代である。東海道新幹線が開通し、東京と福井県の時間的距離が近くなった。いざなぎ景気、日本列島改造論などで日本経済が右肩上がりの状況になり学生の生活も一変した。戦後生れの多くが大学に進学する大学大衆化時代になり、これまでの東京の大学に行く学生とは価値観がどこか違っていた。大学の数も増え、学部も増え、もちろん定員も増えてマンモス校と言う大学が出現した。当然ながら明倫学舎も県の支援、数人の篤志家の支援もあり受け入れ態勢を整え、1965(昭和40)年に鉄筋4階建ての新学舎を完成させた。収容学生数98人で旧学舎の3倍である。部屋は洋室になり二段ベッドの四人部屋と二人部屋であった。食堂は広くなり、図書室兼自習室では勉強もでき、トイレは水洗で、各階ガスコンロと洗濯機付である。当時の時代の先端をゆく快適な学舎であった。

1965年(昭和40年)新学舎に学生が入舎

し、総勢98名となった。旧学舎生が30名であり、新たに学舎生が増えて学生委員会(自治会)の委員長らは、当初は学生の規律の遵守に相当な苦勞をしたとのことである。

学生委員長<sup>15)</sup>は旧学舎の学生が新館に移る思いを次のように述べている。

「新学舎に入舎が始まり、30人の学舎生が一気に98名になった。旧学舎から移ってきた学生は、かつての旧学舎の家族的な雰囲気は薄れて寂しさを感じた。また多くの学舎生が団体生活をする上での規律の遵守を徹底するのが難しい時もあった。しかし、新築の学舎での生活は時代の先端をゆくような快適さがあった。小さな問題は少なからずあったが、団体生活を理解して自主的に解決する能力が既に大人として学舎生に備わっていたようである」。

70年代は大学紛争が激しくなり、多くの大学で休講があった。大学の荒廃を学舎生活に持ち込むものはなく、むしろ平穏であった。これは学舎生が生活基盤の学舎と大学との区別が出来ていたためである。この頃学舎内では、縁故のある学者を招いての講演会も行われていた。図書室で大学へ休講科目のレポートを書いていた舎生が多かった頃である。

明倫祭は時代を超えて学舎生の楽しみであり、最大のイベントであった。土井信良氏は在舎していた昭和7年頃から「明倫学舎の神輿」が行われていたと語っている。いつの時代を聞いても皆の記憶が鮮明である。特に近隣にある東京女子大茜寮、明治大学女子寮との交流も年代を超えて継続している。また、吉祥寺、西荻窪商店街の方々からのご寄附を頂いたパンフレットも存在し、当時から営業活動もしていたようである。この活動が学舎

生や女子大生，地域の人々との人間関係を円滑にする第一歩であった。

しかし，この時代ごろから福井県出身の代議士諸氏，経済界の諸氏が明倫学舎を訪れて学舎生に薫陶を与えたり，学舎祭に参加したり，予餞会で4年生を食事に招待したり，進路の指導をしたり等の事例が徐々に少なくなってきた。1980年代には残念な事に，永きにわたった良き伝統が，時代の変遷と共にほとんど無くなっている。

以上がこの時期の学生気質である。受け入れ人数の急増によって舎生同士の交流を拡張しているが，学舎周辺地域やコミュニティとの結びつきにも活動を強化するなど，幅の広がりが見られることが特徴的である。一方で福井県出身者との交流が薄れてくるなど，現代に繋がる課題の端緒もまたこの時期から見受けられるようになった。

#### 4. 1980（昭和55）年から現代まで

この頃，日本の家族形態が変革をはじめ，核家族化，少子化，個人のプライバシーの保護などの方向に急速に向かった。このため明倫学舎も従来からの四人部屋では入舎希望者が少なくなり，また入舎してもすぐに退舎する学生が増えてきた。1980（昭和55）年に学舎の大改装を行い，四人部屋と二人部屋を廃止して，個室42部屋，二人部屋11室の定員64名とした。

その後も日本の多くの家庭が子供に個室を与え，個人を主張するようになった。学舎も時代の変化に合わせ，改装を重ねて1991（平成3）年に全室個室化になり定員は54名になった。25年前に新学舎建設当時の定員の

約2分の1である。

個室化されていても現在の学舎生も集団生活を楽しんでいる。習慣化されていることは，挨拶の励行，共同風呂の清掃，空地の草取り清掃，年に何回かの大掃除，食事後の食器を洗っての返却，などを自主的に全員が行っている。これらは先輩から後輩へと受け継がれている重要な精神文化である。

2000年の初頭一時的に，東京大学をはじめ，難関大学の学生が学舎生として増えた。このような大学生以外は明倫学舎には入舎できないという風潮が福井県内の高等学校であったようで，理事者側も偏った選抜は育英理念から見て望ましくないと判断し，大学，学部を問わず希望者を選抜して入舎させた。その頃から学生気質も少しずつ変化し，60年代，70年代のような「真面目」とは異なる，「生真面目」な学舎生が増え大学の講義に出て安定した大企業や，公務員や東京での起業を目指す学舎生が増えた時期である。

現在では時代に合わせて，全室個室で，机，椅子，本棚，ロッカー，エアコン完備である。昭和時代の明倫学舎とは団体生活の意味合いが違ってきた。共同施設は，食堂，洗面所，洗濯場，トイレ，ロビー，図書館，24時間対応風呂などである。舎費は現在でも，夕食込みで月額¥35,000円と安価である。

このように，現在の明倫学舎は家族形態や学生気質の変化に対応しながら，その存在意義を維持しうる活動を持続しつつ，新たなタイプの学生受け入れも積極的に行っている。

以上明倫学舎の経緯を概観したが，その存在意義は舎生，すなわち学生にとってどのようなものであったのだろうか。次章では多様なOB舎生や現役学生舎生からのヒヤリング

調査を整理しこの意義について述べる事にしたい。

### Ⅲ. 明倫学舎生の証言

明倫学舎の育英方針は、舎生に対してその社会的、自然的環境を整えて、集団の中での相互依存関係を通し、自己のアイデンティティ形成を促進し、自己ストーリー作成を支援し、舎生の間人性の確立に寄与するための触媒となりうることである。

この章は70周年記念OB舎友会開催にあたり、OB舎友、現役学生舎友など約60人の方々からの、寄稿文、聞き取り調査、アンケートを行い、記念誌を作成した資料<sup>16</sup>を基に、そこで学んだ舎生の意見集約を行い、明倫学舎での自己ストーリー確立や学舎の存在意義を筆者が4項目に要約したものであり、各意見が項目ごとに明確に区分されているわけではなく、他の項目に関する意見が含まれている部分もある。コメント末尾の( )内は舎友の入舎年である。半世紀以上に及ぶコメントを並べてみると、共通点が多いことに驚かされる。つまり明倫学舎での学舎生活は長いあいだ一定の役割を果たし続けてきたのであり、これがまさに明倫学舎の存在意義に繋がるのである。

#### 1. 自主性、自立性が養われ人間関係が深化する

明倫学舎内の日常生活は学生の自主的な組織で運営されている。学舎生活には時代によっては舎監が常駐していない時代もあった。理事長や役員は非常勤である。通常は事務職員か又は、舎監が一人いるだけである。

そのため日常の管理運営は学生の自主組織が責任を以て役割分担をし、自ら決定し実行する。この経験は高校生活から明倫学舎に入舎し初めて学ぶものである。もちろん学舎運営上の重要、重大事項などは理事長、理事などの理事会で決定する。

学舎における自主運営活動は、卒業し各人が社会人となり、人と交わり、組織の中で自分を活かし、組織を動かす方策を考える事を、学生時代に毎日の学舎仲間との共同生活の中で自然と身に付けて行くのである。70周年記念OB舎友総会に福井へ集まった130人ほどは皆が異口同音に、共同生活で培われた人間関係の有難さを社会人になって痛感したと語った。

#### (1) OB舎友のコメント

・明倫学舎にはこれと言った厳しい規律もなかったと思うが、先輩、後輩の一人一人が自分の立場をわきまえ、相手の立場を尊重して限度内の規律を守って、トラブルもなく仲良く家庭的な安心感のある学舎であった。そんな中で切磋琢磨して自分を磨き上げた。今後入舎する若い人たちも同様の思いを思うと思うが、明倫学舎が人を育てるという素晴らしさはここにあると思う。

(1953年)

・木造旧舎には25名前後の若い個性が集い、明倫学舎伝統とかの完全自治は奔放な学徒ならぬ遊徒も生みかねなかった。目標を胸に秘めた様子で大人びた諸先輩たち、福井から都会に出てきたばかりで夢と希望に胸膨らむも一抹の不安を覗かせる新入後輩たち、いずれも自重心と良識を備えたもの同士で、歳月は楽しく過ぎていった。(1957年)

- ・寮生活なくして学生生活を語ること無かれで、寮生活はやっぱりすごい。全くの自治であり自己管理の世界です。友達の影響はものすごく大きい。1年半程の寮長時代は、入寮試験も全部我々が決めた。(1958年)
- ・門限はあって無きがごときで、管理、監督は万事緩やかであった、規則は破ろうと思えばいつでも破れたが、ほとんどの学生は自分で歯止めを効かした。(1960年)
- ・新学舎には小さな問題は少なからずあったが、団体生活を理解して自主的に解決する能力が、既に大人として学舎生に備わっていたようである。(1963年)
- ・学生委員長をした経験は、盛り上げ役、なだめ役、議論をまとめる役と価値観の違う人との人間関係を円滑にする勉強をした。4年間の学舎や大学での何をするわけでもない無駄な時間が今の人生に大きく役立っている。もちろん時間のある学生時代にもっと勉強しておけば良かったという後悔の念も少しあるが、よく車のハンドルで言う「あそび」の部分が大事と言うが、それを覚えた。(2001年)
- ・私は副議長を経験したが、学生委員長と学舎を良くするためにはどうしたらよいかを、夜を徹して侃々諤々と議論した経験は今となっては大切な財産である。学舎生活では切磋琢磨し刺激しあえる仲間がたくさんでき、一生涯の友情も築けた。(2010年)

## 2. 切磋琢磨し合う団体生活の学舎である

「ダイヤモンドはダイヤモンドで磨く」という言葉がある。明倫学舎の学生は、福井県から高い志を持って上京し、将来の夢や、希

望をこの学舎での共同生活を通じて、異なる大学、異なる学部の先輩、同輩、後輩など、お互いに触発されて、切磋琢磨し、志を実現させようと努力する。そこで若い青年の進取の気性が培われるのである。多くの舎友が上京して一番初めに感じた所である。

また、創設以来、理事長、舎監をはじめ輔仁会の理事の方々や、代議士諸氏の方々も、事あるごとに学舎に立ち寄り、郷里の後輩たちに愛情を注いだ。諸氏からの貴重な薫陶を受けて触発し、自らの将来を決める舎生が多いのも永い伝統である。

### (1) OB舎友のコメント

- ・明倫学舎での生活は、私の人生に於いて最も貴重な体験であり、諸先輩や先生方との忌憚のない交流を通じて、私の人格形成にも、その後のビジネス生活にも大変役立った。少しでも恩返しが出来ればと理事長をお引き受けいたした。(1956年)
- ・当時の明倫学舎には岡田啓介首相の秘書官をされていた福田耕氏、元国鉄総裁の加賀山之雄氏、元日本通運社長の早川慎一氏等々、多くの福井県出身の名士が頻りに訪問され、我々学生に良きアドバイスを頂いた。福田耕先生には寮の改築時、自宅に宿泊させて頂き、お酒をご馳走になりながら人生の生き方等々、大変有意義な話を伺うことが出来た。加賀山先生にもご自宅などで大変お世話になり私の就職と仲人までお願いした。現在も私の会社がJR鉄道貨物の仕事をしていますので、何かとご縁が深く助かっている。(1956年)
- ・毎春の卒業生送別に当たり、1月14日成人の前日夕方に催された「予餞会(よせ

んかい)」では郷土の大先輩である臨席理事から餞(はなむけ)の言葉が贈られました。早川慎一理事長の「随所二主トナレ」、植木庚子郎理事の「裏表をつくるな」など、今も忘れられない。(1957年)

- ・元最高裁判所長官 石田和外理事長の思い出では、昭和42年当時は大学紛争で混乱していた時代でしたが、剣道がご縁で有楽町の剣道場に早朝稽古に行き先生や先輩の方々と稽古をして心身ともに鍛えられた。また、冬の寒い夜に最高裁の公舎に学舎生の数名が招待され、ストーブに暖まりながらビールに、すき焼き、お寿司をいただいたことは今では夢のようである。(1965年)
- ・様々な大学の人との交流で切磋琢磨して学業に励んだ。明治大学女子寮や東京女子大学などとの交流が非常に楽しい思い出であり、楽しく自由に青春を謳歌できた。

(1966年)

- ・薫陶を頂いたそのお一人は2008年にノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎先生である。先生は、東京帝国大学理学部時代に輔仁会の寮で過ごされたと聞いている。2009年に明倫学舎の舎監から「シカゴ大学の南部先生にノーベル賞受賞の祝意をお伝え頂けないか」と依頼があった。当時の学舎生諸君の「南部先生おめでとう」などの寄せ書きした色紙を持参すると、先生も大変喜んでくださって、そのお返しとして「破対称至万象」(対象の破れが全てのものに至る)と大書した色紙を学舎生諸君にと頂いた。これは現在、明倫学舎の食堂に掲げられている。
- もう一人は元衆議院議長の福田一先生です。輔仁会寮の先輩でもあり、大野高校、東京

大学の大先輩でもある。この先、進路にいろいろ迷ったとき、叱咤激励された。そして私が大蔵省(現財務省)の内々定を受け、先生に報告に行くと、大層喜んでいただいた。先生に保証人をお願いすると、快諾いただけた。(1990年)

- ・先輩方からは多くの教えを授かった。しかし日常で最も刺激を与えてくれたのは同期だった。同期は本当に多様で専攻から趣味に至るまで一致するところは少なかった。よく遊び、よく語りあった。たまに各々の野望などを語り合ったときは大いに刺激を受けたものだ。今でも同期で集まれば当時の想い出話で異様に盛り上がることに思いを致せば、私たちは本当に貴重な時間を過ごしたという事だろう。(2008年)
- ・明倫学舎での集団生活4年間を通じて、上下関係を大切にすることはもちろん、周囲への配慮といった社会人として必要な協調性を身に付ける事ができ、人間的に成長したと感ずることはもちろん、この学舎生活で一生の仲間を見つけることが出来た。学舎生活で得るものも多くあった。(2010年)
- ・大学生生活は不安なことが沢山ある。しかし、たいていの不安や心配は自分以外の人からアドバイスをもらう事で解決する。特に、自分と違う大学の学生のアドバイスは学舎生活でしかできない貴重な経験であった。直接的なアドバイス以外にも、他大学の学生、特に文系の学生の高い社交性と協調性からは見習う点が沢山あった。(2011年)
- ・明倫学舎に入り、様々な大学の学生との友好関係を結ぶ事は、学生生活の孤独感を和らげてくれた。また、様々な大学生と交流する事は自分の価値観に対する視野を広げ

てくれた。大学を卒業し大学院では再び明倫学舎で生活させていただきたいと考えている。

今後の学舎生活ではアドバイスをもらうだけでなく、大学院生として何か後輩にアドバイスできたらいいと思っている。(2011年)

- 異なる価値観の舎生が50人いる中で自然とコミュニケーションをとる勉強ができ、非常に住みやすく、刺激がある学舎であり、自分が成長できる事を期待している。

(2014年)

- 社会人として自立するための環境があり充実した生活が送れそうである。文系、理系、他大学生、上級生、下級生と様々な条件の学生と暮らすことで、通常の学生生活では得られない影響を受ける。事実良い影響を受けている。よく遊び、良く学び、有意義な学生生活を送りたい。(2014年)

### 3. 地域との繋がりを保ちつつ、 人と人の繋がりの重要性を認識する

明倫学舎の団体生活は個人、個人が良いところ、悪いところを理解し合って、そして人と人の繋がりを作る基礎を学ぶ処である。そこには無意識のうちに親交を深め、生涯の大きな財産となる友を作る大人の心理が存在する。同じ大学でなく多種多様な大学、学部生の集合体であり、学舎生活を謳歌した学生にのみ与えられる財産と恩賞である。

多様な人との出会いが正解のない世界で自分なりの答えを導く人材に育つことが期待される。

現在の日本では、合意の調和性が重要視されてきて、何事も独りでは完結できないような社会構造になっている。組織で活動し組織

を活かす重要性が多く企業の企業で求められている点である。

それゆえ意思決定から実行までに、協調性に加え、取り巻く関係者とのコミュニケーション能力が要求される。近年は大学でわざわざコミュニケーションとか人間関係を学部、学科として学ぶところさえある。

コミュニケーション能力を向上させるには、多様な経験を積み重ねる事が何より重要であるが、明倫学舎の生活は将来に通じる豊富なコミュニケーションの機会を提供するという意義を持っている。明倫学舎は4年間在舎すると、上下7歳の人達と合計100人程度の同世代の福井県出身者と共同生活をする。すなわち、そこだけは東京の中で福井県である。このような場合は明倫学舎のみと言っても過言ではないだろう。したがって、その中で親交を深め、自分と他人の関係性、人と人の関係、接し方、人を判断する基準などを学ぶことによって学舎生は独自の成長を遂げながら日常生活での合意の調和性が無意識のうちに身についてくる。そのことは大学とは別の帰属意識と故郷意識を学生に与えるものであり、都会のなかでの一人の生活では学ぶのが難しい部分である。

社会人となる前のこのような貴重な人間関係の経験は、多感な青年期における人生のアドバンテージとして価値の高いものと考え、そのことが、OB舎生の多くが社会人となってから語る『明倫学舎大学コミュニケーション学部卒業』と言われる由縁である。

#### (1) OB舎友のコメント

- ・100人の仲間と共に青春を謳歌した半世紀前の記憶がよみがえってくる。人生でこの

- 4年間程楽しかったことはない。学生の身分である学業に励むことも忘れ、寮や大学の仲間と昼夜を問わず、気の向くまま自由気ままな生活であった。後々付けが回ってくるであろうことも知らず、遊び呆けていたものである。(1966年)
- ・学業は勿論だが同郷の仲間と過ごす4年間は、少なからず意義、メリットもあるのではないだろうか。先輩、後輩を問わずたくさんの友を得て、愛郷心も醸成され、何より人間として、社会人としての基本である「長幼の序」が自然と身に付くのである。素晴らしいことだと思う。(1967年)
  - ・入舎時の自己紹介は社会に出て最初の自己アピールの場であり、組織人への第一歩である。人と人の挨拶の仕方が自然と身に付いた。人的関係の修養の場所であり本当の意味の一つ釜の飯を食った4年間は卒業生の共有財産である。(1967年)
  - ・4人部屋は4人毎日が修学旅行、気づいた時は大学に余り行かなくなっていた。色々な高校からきていて高校時代には偏差値で自分のレベルを決められるが、明倫学舎の生活には偏差値での付き合いはない。出身高校や大学での付き合いではなく、同じ舎生としてイコールでの付き合いがあった。これが社会人となった時に人間関係がうまく構築できる強みである。(1968年)
  - ・明倫学舎祭の寄付金集めが大変でもあり楽しかった。昔のパンフレットを見ると、吉祥寺、西荻窪のお世話になった店が思い出される。学舎内での模擬店も皆で作り上げ、仲間意識と熱い情熱があった。(1968年)
  - ・明倫学舎にはいろいろな大学の人がいて、いろんな考え方の人がいるが、同じ福井県

出身ということと面接があって入舎したということで、極端な思想に走ることなくコミュニケーションがとれたのが良かったと思っている。(1971年)

- ・団体生活であり、良きにつけ悪しきにつけ、人間関係での楽しみ苦しみ学べた。学生は自分を飾ることなく皆むき出しの人間であった。学舎での思い出を振り返った時、本当に学舎生活を謳歌していたという事に気付いた。学舎生活は一人一人が自分の興味に従って行動する事が出来るところである。(1989年)
- ・会社で後輩の指導を担うことが増えてきた。有名大学を卒業し、成績も優秀な彼らにはある共通点がある。それは「居心地の良さ」を最優先に求めること。そして何事も受動的であること。厳しい社会人関係の中で折り合いを付けられず、自分の努力が評価されないという早い段階で悩む人間が多い。そんな時、明倫学舎のような環境で過ごした自分は幸せだったのだと感じる。中には厳しい先輩も居たが何とか折り合いをつけ、「居心地の良さ」を求めるには常に自らが能動的に何かを発信する必要があったからだ。(1994年)
- ・仲間意識を持ち続けている人間集団は、学生時代の人間形成が充実していた証拠である。人と人のコミュニケーションは意識して創造できるものではなく、集団生活の中から自然発生的に取捨選択しながら生まれるものであるような気がする。周囲の人に対する配慮が勉強でき社会性を身に付けられたと思う。(1995年)
- ・一番の思い出は、3日間行われた寮祭である。初日の一発芸・二日目のJAZZや料理

大会、最終日の御神輿など、4年生の最後の御神輿での練り歩きでは、酔っ払いながらも、終わることが悲しくて号泣しながら、東京女子大学正門・善福寺公園のフィナーレへ向かったのを覚えている。(2000年)

- ・学舎には癖のある仲間もいたが面白い人間もいた。朝、夕の食事が喰えた明倫学舎ほど恵まれているところはない。自分で自然と友達を選択して生涯の友を作った。

(2001年)

- ・学舎の仲間が楽しく、面白くて大学の講義を受けに行く暇がないほどであった。一年生入舎時の新入生歓迎会で、先輩たちの愛情のこもった歓迎は、未だ私の記憶に「衝撃」として残っている。(2001年)

- ・学舎生活では食堂や共同風呂、また新入生歓迎会や学舎祭などのイベントを通して先輩、後輩、時には学舎生OBの方々とのコミュニケーションを取ることができる機会が沢山あった。そうした経験を4年間積んだことにより、自然と相手との距離感がつかめるようになり人間関係の構築に大いに役立っていると感じている。こうしたことは一朝一夕にできるものではなく、その意味で4年間の明倫学舎生活は本当に貴重なものだったと思う。このような経験は社会に出た時にも大いに役立つと思う。(2011年)

- ・1971年(昭和46年)から2006年(平成18年)まで、経理事務職として学舎に長く勤務し舎生の生活をつぶさに眺めてきた亀井和子氏は、1992年(平成4年)の『明倫祭パンフレット』に「明倫祭の思い出」と題し寄稿し、新館当時の明倫祭を次のように書き残している。

「木の葉の色づくこの頃になるとまた明倫

祭の季節だなあとと思われます。はるか昔は模擬店が盛んで、そば、寿司、おでん、スナックと、ご近所の方々も食べに見えたりして、創る学生さんの方々も本職に見習いに行くほどの熱の入れ様で、味もなかなかの物でした。幸か不幸か、それがきっかけで、卒業して福井に帰りお寿司屋を開いている方もいるそうです。

また、全員が模造紙にイラスト、絵等各々の思った物を書いて、一階から四階までの階段や廊下にはりだし、投票して景品を出していたという企画もあり、毎年楽しみにしていたものです。それから、バス一台借りて、殆ど全員参加で箱根や日光に日帰り旅行しましたが、そんな時、普段見られない面などが分かり、尚一層連帯感を持つようになり、一生の友達も出来たようです。卒業して別れるのが辛くて後ろを、振り返り、振り返り学舎を去ったと云う人もいました。

#### 4. 心の安らぐ「ふるさと」を意識しながら学生生活を送る

明倫学舎は初めての東京でも安心して一人暮らしができる場所である。自宅から離れ、親元から離れ、自己管理の下で自分を磨くために上京した学生である。福井弁が通じて、楽しくもあり苦しくもあり、いわば鳥の巣立ちのようである。福井の親は子の健康・自立を心配するものだが、学生は自分のことで精一杯で、多くの仲間と揉まれるこの時期に自立するための懸命な努力している。

寄稿文、アンケートや聞き取り調査<sup>17)</sup>に集約されているように、多感な年代の学生が共同生活をしているが、学舎はくつろぎの場と、

仲間の待っている自宅という感覚である。特に1学年は夢で見た東京に圧倒され、その華やかさと、楽しさと、便利さ等に感わされ我を忘れそうになる。はじめの頃に、外に出ると見知らぬ人がこんなに多く蠢いていると驚く東京で、学舎に戻れば故郷福井が温かく包み込んでくれる場所が明倫学舎である。

大学も学部も全く違う学生の集合体であり、左右多岐にわたる思想、信条が渦巻いているが、その喧騒を学舎に持ち込んだ学生はいなかった。卒業して初めて感じる点は、多くの同級生や先輩、後輩との気脈の通じた知り合いが出来たことである。明倫学舎OBと言うだけでの連帯感は、社会人となってからも何物にも換え難い。人生の青年期後半から成人期前半の多感な時、若者の健全な成長を促すには、理想的な学舎といえる。

東京ではじめてマンションやアパートで独り暮らしをする場合と比較すれば、格段の安さであり、食事（近年は夕食のみ）が出ることは安心感がある。

しかも、もう一つの拠り所は、やはり福井弁が通用する場所があるという事である。最近では嶺南出身の学生も入舎するようになった。まさしく県人寮の真髄である。東京で心の安らぎを覚えるのはこの空間であることは多くのOB舎生がコメントしている。そして若者が憧れている街、武蔵野市吉祥寺にある。

#### (1) OB舎友のコメント

・芦原からいきなり大都会に出た時はどうしたらよいかわからなかった。しかし大学から明倫学舎に帰れば福井弁で話ができるし、同級生や先輩たちが兄弟のように心強く思えた事は未だに忘れることはできない。自

宅に帰ったような安息の場であった。

(1953年)

・貴重な青春の4年間を素晴らしい先輩、同期、後輩に恵まれ切磋琢磨した明倫学舎時代が年齢的に人生の芽吹き時代であったからであろうと思う。平穏と楽しさ、親から独立をして東京で生活をする貴重な体験、福井には帰りたなくなる場所である。外では東京弁を使い大変気を使うことが多いが、寮へ帰って来ると福井弁ですから気を使わずに済む。学舎は私の心の故郷であった。

(1953年)

・独り暮らしでは食事が大変であり、何事にも孤独である。美味しい学舎の食事が有難かった。なによりも安価な就学費用であり、同郷の仲間と一緒にいることが心強かった。大学近郊に住むよりも多くの経験が可能である。

(1960年)

・1970年代前後には、ますます学生運動が激しくなったが、学舎では英書の輪読会や囲碁の先生を招いての囲碁研究会も開かれていた。福井市名誉市民で天文学者の藤田良雄博士が学舎内で講演された。

(1968年)

・居心地、拠り所として心身ともに安心した生活を送っていた。居心地の良い今の福井の社会に身を置いて、もう一度東京の生活を楽しみたい。

(1975年)

・自由を謳歌する大学時代だからこそ、「明倫学舎」での生活には学ぶべきことが凝縮しているように思えてならない。私でも、こうして実感できるだけのものは確実にあったのだから。そして、今更ながら「明倫学舎」での生活や出会いに感謝するのである。その貴重な経験の影響を受けた同級舎

生は、今でも時たま逢って自分のエネルギーにしている。(2003年)

- ・西荻窪の街は昼も夜も丁度良いくらいに賑やかだから、ふらっと出かけて帰ってくるのに、ちょうどいい。駅前からぶらさがる提灯の明かりは温かみがあって、人情味あふれる印象、そういう街に明倫学舎はある。レポート書き、部活の練習、他の学舎生との会話、そんな日常をこの学舎は当然のように与えてくれたけど、今になってその有難さが判る。4年間お世話になった。明倫学舎ありがとう。(2010年)
- ・明倫学舎での思い出で一番記憶に残っているのは、東日本大震災である。学舎はものすごく揺れ、食堂のテレビが倒れて二つに割れ、近所では壁が崩壊する等、規模の大きな地震でした。東京全体で見ても、電車はもちろん止まり、人々は数時間かけて歩いて家に帰り、店で販売されている食料品が十分無い事から、コメの入手が難しくなるなど様々な問題が起こった。その時、学舎では前舎監が舎生の安否を確認するとともに、調理師の方が「おにぎり」を用意してくれました。今になって当時を振り返り「もし一人で住んでいたら」と考える時がある。一人で大きな災害に合うとどうしていいのか迷う。買い物に行っても食料がないので食べるものに苦労していたかもしれない。学舎では前舎監のとっさの判断や、調理師の方の配慮に助けられた。私も社会に出ていくにあたり、周囲への配慮を大切にすることはもちろん、その時々に応じて適切な対応を取ることができる社会人になっていけたらと思う。(2010年)

#### IV. (公財)輔仁会・明倫学舎の存在価値(1)

ここまで述べてきた(公財)輔仁会・明倫学舎の経緯や関係者のコメントから本章と次章でその存在意義について考査する。

第一に人材輩出と舎友会ネットワークの構築があげられる。130年を超える輔仁会・明倫学舎の歴史のなかで、約4,000人の卒業生(舎友)を輩出してきた。ノーベル物理学賞受賞者、内閣総理大臣、衆議院議長、福井市市長に加え、勝山市長、武生市長ら政界、官界、経済界で活躍された舎友は数知れず、また著名な作家、東大名誉教授や東大教授、多くの大学教授などの学界で活躍された舎友、国、県の医学界で活躍する新旧の舎友は多い。異色な存在は、若手で期待の演歌歌手も4年間在舎した。

福井県下には現在約300人を超える多士済々のOB舎友が各業界で活躍されている。福井県に帰って開業医をしている舎友も戦前<sup>18</sup>、戦後を通じて多くいる。経済界の代表はもとより教育界にも戦前戦後を通じて現在まで高等学校の教員も多い。県庁、市役所や地元銀行等にも舎友は多い。地元の企業や醸造酒元や商店、農業等で家業を継ぎ、代表者として社業を発展させている舎友の名も聞こえる。

明倫学舎での先輩、同輩、後輩との密度の濃い親交に支えられた共同生活の経験は、人格形成に果たしている役割は大きく、実社会に出てこそ活かされていると、多くの舎友が述懐している。そして同期を中心とする舎友同志の人脈ネットワークは、得難いものである。そこに、輔仁会関係者の人脈が融合して、先輩、後輩の大きな拡がりになっている。

理事長経験のOB舎友は、起業にあたっての輔仁会人脈の支援が今日の自社の成功を導いたと語っている。福井で家業発展に取り組んでいる若手舎友は、福井での同期との交流に触れているが、卒寮直後に交通事故で亡くなった同期のご両親との交流を今も続けていることや、同部屋の者同士が卒業50年以上経過した今でも家族ぐるみの付き合いをしている舎友もいる。それは、共に学舎生活を経験した者にしか理解できない何かを感じさせる。明倫学舎のレーゾンデートルの根本はこのようなところにある。

また、舎友の寄稿文から舎友間及び輔仁会役員との深いつながりがわかる。理事長、舎監、評議委員の先生方から受けた薫陶は、学舎生のその後の進路や生き方に大きな影響を与えている。澤田儀兵衛舎監、高橋幸八郎舎監、福田一衆議院議長、加賀山之雄氏、福田耕氏、早川慎一理事長、石田和外理事長、県選出の代議士諸氏<sup>19</sup>、など多彩な学舎の先輩や福井県関係者から薫陶を受けて学舎生活を謳歌した様子が述べられている。

現在、明倫学舎では、就職活動中の在舎生が全国のOB舎友の企業に訪問ができるように多くのOB舎友を登録している。またUターン希望の学生と、故郷福井県の企業との求人説明会活動も学舎内で行われている。しかし参加企業が数社である。今後、数多くの福井県内の企業の積極的な参加を期待したい。

今後とも、理事側とOB舎友の協力した力が福井県出身の若き人材を育て、その人材が福井県に戻り、地方創生の確かな原動力になっていくことは大いに意義のあることであり、明倫学舎の存在意義も大きくなる。

## V. (公財)輔仁会・明倫学舎の存在意義(2)

次に(公財)輔仁会・明倫学舎のもう一つの存在意義として育英事業の理念推進と継承が挙げられる。

Ⅲ章の冒頭で述べた明倫学舎の育英理念の継承には、歴代の理事、評議委員の功績が大きい。1982(明治15)年以來、時代は変遷してきたが、一貫していることは、福井県から上京して学ぶ学舎生を、組織全体で暖かく包み込みながら学業はもとより、それ以上に人間性の成長を支援する活動であった。例えば、設立当時の歴代の理事長、理事、舎監、評議委員が事あるごとに学舎を訪れて、学舎生と直接対話し、酒を酌み交わすような場面も度々設けて意思の疎通を図り、理事者達も学舎生の人間的成長を心より喜んできた。学舎生のある者はそこで人生の大きな薫陶を得た。ある者はその時に生涯の進路を決めた。現在でも理事の方が貴重な休日の時間を割いて、学舎周りの草刈りや、樹木の伐採までを行っている光景などを見る。

もう一つは、理事者側が学舎生の日常生活の自治を信頼して現在も続いてきた点にある。学舎の日常活動の運営は永年、脈々と歴代学生委員長が努力し学生たち自からが行っている。時代の変遷で、かなりの困難な問題にも遭遇したが、学生達が自らの知恵と努力で解決能力を発揮してきた。委員長を経験した諸氏のほとんどがその学舎生時代の委員長経験が社会人となって生きていると語っている。

学生中心の学舎生活の自主運営を、肯定的に限界まで見守る理事者側の一貫した信念、理念にリスペクトし、1882(明治15)年以

来近代日本の大きな変革にも揺るぎなく育英理念を現在も継続している理事者及び関係者に敬意を表する。

東京に戦後にできた大規模な「和敬塾」という全国各地から学生が集まる学生寮が文京区にあり、この学生寮を題材にした『教育の忘れもの』<sup>20</sup>という著書がある。

明倫学舎で営々と受け継がれている事柄と、同じ様な事が書き綴られている著書であり、多くの卒業生が誇りを持っている学生寮である。

その巻末の一説を記載する。

「それにしても、東京の学生寮で青春を過ごした人々が、定年を迎えるころになって、ますますつながりを深め、大学の仲間とは違う。和敬塾の仲間だと何年たっても『オウ』と言う挨拶だけで、心は20代に戻るもの。集まりの連絡をうけると万障繰り合わせてでかけるなあ、と言いながら仲間意識を持ち続けているのは、人間集団として見事な結束としかいうほかない。創設者の狙いは完成したかに見える。

心理的に分析しきれるものではないと思いますが、もし和敬塾のような学生寮が全国的に広がって、青年の人間形成が充実してゆくとすれば、日本の将来も明るくなるが可能性はどうだろうか、70年代半ばに和敬塾を卒業した教育心理学の教授に聞いてみた。奇特な実業家が建物を作って学生を集めるところまでは出来るでしょう。問題はその後です。ありきたりのノウハウではカバーしきれるものではありません。もし創設を夢見る人が現れて、成功のため一番大切なものは何かアドバイスを求められたら、私は迷うことなくこう答えるでしょう。『ポイントの一つ、

人間の生き方に対する確固たる理念に尽きる』と。傍らで現理事長が『創始者は“教育の忘れもの”を埋めるために、精魂込めていたような気がします』と一言付け加えた。

まさしく戦後に設立された和敬塾の育英理念は、1883（明治15）年から続く輔仁会・明倫学舎の育英理念その物の投影であり、「真の大学生教育とは何か」との問いかけの解の一助になる。

明倫学舎の存在は広く世に知られてはいないが、1883（明治15）年から日本の激動の歴史のなかで育英事業を継続し育英理念が変わらず継承されている学生寮が存在する事実は福井県にとって貴重な財産であり価値がある。今後の福井県の地方創生、福井県の活性化に役立てることで付加価値を付けたいものである。

## VI. 福井県の地方創生への示唆

学舎生は、福井とのつながりをより強く持ちながら4年間を過ごすことになり、卒業生は約3割が福井に戻り比較的に高い帰郷率とされている。県内企業や教育現場、県庁をはじめ県内の市役所等に就職し、また家業を継承している者も多い。毎年、優秀な人材確保を図る福井県関係の企業に対して人材を送り出す「地方創生」の一定の役割を果たしている。それだけでなく、県外での就職を選択した者も、世界に羽ばたいた者も、福井県の将来に貢献を強く意識していることが、今回のアンケート調査や聞き取りによってうかがえる。

そこで、明倫学舎の存在意義から地方創生を一層進めるために次のような方策が考えら

れるであろう。まず、近年、多くの自治体が取り入れている「ふるさと納税制度」を積極的に学舎生にアピールするのも一つの方法である。講正学舎と武生郷友会とあわせ福井県の3つの学生寮出身者は「ふるさと福井」に愛着を感じ、学舎にお世話になったとの恩義も感じている。

卒業後福井県に帰郷しない社会人の多くも、福井県に対しての愛着を深く継続して持ち続けている。明倫学舎OB舎友でも、県外で活躍中の経営者や上場企業の方が無数に存在する。県人寮に4年間お世話になった恩返しには「ふるさと納税制度」を利用推進するのも相応しい考え方である。

県人寮でお世話になった恩返しをする事、それが卒業後の明倫学舎生の社会的役割のひとつでもある。

## Ⅶ. まとめ

明倫学舎の存在意義は地方創生を通して福井県にとっても大きいと考えられる。また、明倫学舎に入舎しない福井県出身の学生を含め、福井の学生が東京で交流するための拠点機能を明倫学舎に持たせることも一考の価値がある。明倫学舎の存在意義をより広げるとともに、地方創生の推進にも独自の寄与をもたらすであろう。

すでに輔仁会発足から現在の輔仁会・明倫学舎に至る現在までに130余年が経過している。福井から東京に若者が進学し生活した学舎は、明治維新後から平成の現代までの長い日本の近代史に少なからず貢献してきた学生寮である。輩出人数は4,000人を超えている。

この間に、多くの輔仁会や明倫学舎の関係

者や政界、経済界、教育界など多方面の識者が、東京に進学した福井県出身の若者を指導、育成に尽力をしている。この歴史的事実は何物にも替えがたく、次の世代に引き継がれている貴重な財産である。

また、学生が団体生活の中から自分の価値を高め、人間関係の構築に自然と努め、学問以上の人間的成長を育み社会性を学んだ事実は、学舎生活を体験した者にとっては貴重な人生の財産である。

しかし、残念ながら明倫学舎は福井県の教育史の中にもほとんど取り上げられていない。福井県内の企業や官庁、教育界の関係者にOB舎生が多く存在するが、明倫学舎の「真の大学生教育」の有意義性が公に周知されていない。

今後、福井県に帰郷しているOB舎友は、大学で学んだことだけでなく、学舎で磨き培った自主、自立、コミュニケーション力、人間関係調整力などを存分に発揮し、各方面に強い影響力を与え、福井県の地方創生活動、ふるさと活性化の原動力として、これまで以上に積極的に「公」に出て多いに発展に寄与する努力を期待する。それが結果として明倫学舎で団体生活を学んだ価値を高め、存在意義を高める近道である。

また、福井県に戻らなかったOB舎友諸氏も社会の中核に飛び出し、世界、日本、に大いに貢献することが期待される。その結果として、社会に明倫学舎の存在意義が広く認知されることになる。

注)

- 1 福井県総合年鑑
- 2 岡部光明「大学生の品格」2013年日本

評論社

- 3 全国学生寮協議会調べ 2015年
- 4 福井県教育委員会 福井県教育百年史  
第一巻通年編（一）1978年 P1027
- 5 熊沢恵里子『幕末維新における教育の近代化に関する研究』2007年 風間書P300
- 6 橋本左内の遺徳を発揚する景岳会の組織  
とほとんど同じメンバーである。
- 7 後の福井市長
- 8 雑誌「日本」正月号 1987年 日本学  
協会
- 9 1923（大正12）年の関東大震災
- 10 歴史学者平泉澄氏の事で、ご子息で後の  
参議院議員平泉渉氏はここで生まれ育った。
- 11 土井信良氏、松田重治氏、米村輝子氏談
- 12 元理事長 永井保彦氏手記
- 13 岡崎逸水氏手記
- 14 栃谷修次氏、久津見成美氏談
- 15 川端信久氏談
- 16 神崎洋治、藤田道男（公財）輔仁会  
「輔仁会明倫学舎の歴史と意義」2015年
- 17 神崎洋治、藤田道男（公財）輔仁会  
「輔仁会明倫学舎の歴史と意義」2015年
- 18 戦前の明倫学舎のOBの中に奥越地区で  
開業医をされている方々が多い。
- 19 植木庚子郎氏、高橋衛氏、堂森芳夫氏、  
など
- 20 上坂冬子 2006年 集英社